

1月は「インターシップに対する大学と中小企業の現状を知り合う交流会」を開催いたしました。

人間総合科学大学の時光一郎氏、女子栄養大学の浅尾貴子氏、淑徳大学の宮澤健一郎氏、拓殖大学の成澤崇禎氏の4名にお越しいただきインターシップ制度をテーマについて考える場となりました。

初めに栗田会長より「中小企業は採用難の局面にある。これから何をしたらよいかを考える場にしたい」との挨拶で始まりました。

先ず株式会社デリモの栗田社長より「インターシップ実施企業からの現状について」お話を頂きました。

パネルディスカッションでは主に次の3つのテーマについて行われました。

- ① 大学のインターシップの現状、
- ② 企業がインターシップを始めるときの手続きや、企業が行うこと
- ③ これからのインターシップのあるべき姿

① 大学のインターシップの現状では

やりたいことが見つからない学生、周りの意見に左右される学生がみられる、また、企業選びでは、休日や、自宅から通えることを重視する学生も多いとのことでした。インターシップに行った学生は、自分に自信を持ち、大人になって帰ってきます。そのような姿を見ることは大変うれしいことだと話されました。

② 企業がインターシップを始めるときの手続きや、企業が行うことでは

現場の受け入れ態勢も大事なので、どんなインターシップをしてもらえるのかプレゼンをしてもらいます、とのことでした。

③ これからのインターシップのあるべき姿では

出来れば5日間以上（60時間は欲しい）、課題解決型のインターシップや、経営者からは社長の思いを伝えるのと同時に、業界全体の情報も伝えることや、現場の受け入れ態勢を整えることなどの、企業側が事前の準備をしてインターシップ生を受け入れることが大事とのことでした。

学生の現状からみて、学生が受け入れ企業に魅力を感じて就職につながり、また、離職率を減らす課題解決までには、更なる企業側の努力が求められていることを感じました。

株式会社ヤングトラスト 小林栄子